

■山下耕作『あゝ決戦航空隊』（1974）

本文を書くに当たっては、二つのテーマに沿って話を進めていくことにします。一つは、本作の主人公である帝国海軍の大西瀧治郎中将（1891~1945）のことです。特に、本作の脚本家である笠原和夫氏の大西瀧治郎観といことになります。二つ目は、その笠原和夫氏と監督の山下耕作氏との訣別の作となったのが本作ですが、二人の訣別に至る道筋を探っていきたいと考えます。

前回取り上げました岡本喜八監督の『日本のいちばん長い日』（1967）にも大西瀧治郎は登場し、本土決戦を強硬に主張し、「あと二千万、日本の男子の半分を特攻に出せば勝てる」と叫び、東郷茂徳外相に呆れられるシーンが出てきます。大西瀧治郎の名は、「特攻の父」として一般的に知られています。と言っても、おそらく5,60代の方々でもご存知ない方も多いのではないかと思います。さて、この作品の意義なり主張は何だったかと言えば、明らかに天皇の戦争責任を問うというこれまで踏み込むことのできなかった領域に堂々と踏み込んだところだと考えます。

本作が、これまでにない天皇の戦争責任に大きく踏み込んだことは特筆に値することであり、タブー視されていた領域に踏み込んだ脚本家笠原和夫氏の真意は何だったのかを考えさせられます。笠原氏は、「（敗戦後の）後世の”勝利”を掴もうとした大西の情念はアナーキーといえるほど純化されたものだった」とし、ここに「破滅の美学」を見出したことが大きかったように思えるのです。「大西さんは戦後も狂信的な徹底抗戦派の首魁にされてしまったが、合理主義の大西さんがそんなことを心底から考えるわけがない」と言うのは、大西の下で「児玉機関」を率いて暗躍した、あのロッキード事件の児玉誉士夫です。笠原氏は本作の脚本執筆にあたっては、児玉誉士夫への取材を重ねたことを明らかにされています。その中で、大西の真意は「天皇陛下に最前線に立って玉砕していただきたいということだった。その際には大西さんはもちろん、海軍大臣も軍令部総長も首相以下の閣僚も、すべて陛下に供奉して死を共にする。そうやってこそはじめて戦争に終止符を打ち、新生日本を誕生させることができる」と児玉誉士夫は語ったとされます。笠原氏は、陸海合わせて五千人も若者たちが特攻死を遂げましたが、大西はそのすべての責任を自分にあると自覚していたと解釈します。大西は8月16日に自決します。「完全燃焼は人生真っ只中の男たちの究極の願望と言えるのではないか。そして完全燃焼のゴールはしばしば”破滅”と紙一重の近くにある」と。そう考えてみると、笠原氏の作品に登場する男たちは、まさに「”破滅”と紙一重の近くにある」男たちであることが理解できるのです。

笠原和夫氏と山下耕作監督との組合せと言えば、任侠映画の代表作とも言える『博奕打ち 総長賭博』（1968）が思い浮かびます。当初、この作品は正月映画として公開されましたが入りが悪く、岡田茂（当時、京都撮影所所長）から一喝されたと言います。ところが、1年ほど経って三島由紀夫が「映画芸術」誌上で絶賛の一文を発表して以来、急に世間の風向きが変わり、笠原氏曰く「ジャーナリズムのなかで、やくざ映画がわずかながらも”市民権”を得たような傾きになった」状況になります。そして、「もし、そのまま何事もなかったら、わたしは”三島”の名に呪縛されて、ますます様式ドラマにのめり込んで完璧の域に達したか、あるいは袋小路に追い込まれ窮死したかのどちらだったろう」と考えます。1970年11月25日、三島由紀夫が市ヶ谷の東部方面総監部で割腹自殺を遂げると、「最初の感懐は、昭和二十年八月十五日、日本が連合国に敗北したことが明らかになったときに味わった感情に似ていた。無念である一方で頭の上の重石が除かれたような解放感」があったと言います。さて、笠原和夫氏と山下耕作氏は、ともに東映京都撮影所を拠点に活

動する立場にあり、この二人の脚本・監督作は八本を数え、前述の『博奕打ち総長賭博』が初めての顔合わせ、そして『あゝ決戦航空隊』が最後の作品となります。最後の作品は、二人の訣別を意味することになります。『博奕打ちいのち札』（1971）という隠れた名作が二人によって生み出された翌年のこと、笠原氏は”任侠映画”が書けなくなったと山下監督に告白します。そして、「もう”着流しやくぎ”はやらない。現代劇のジャンルでモチーフを探す」と方向転換を示し、山下監督にも方向転換を迫ります。しかし、長い沈黙の後に山下監督は「ぼくは任侠映画にこだわりつづけるよ」と応じ、笠原氏は「袂を分つときが来た」ことを感じます。「”虚”に愛着しておのれを見失わない生き方は、山下耕作なればこそ為しうる業で、わたしなどにはできない芸当ではなかった」とそのときの気持ちを吐露しています。そして、1974年『あゝ決戦航空隊』の脚本を執筆した笠原氏が監督に推したのは、大島渚でした。その理由を「（特攻隊というのは）リアルであるだけでもダメだし、そうかといって観念だけでもダメだし（中略）その両方に足を入れなければならない。それができるのは、ぼくは大島さんしかいないと思った」からと考へ、「東映の会議でそれを言ったら全員に反対をくらう」ことになりました。因みに、笠原作品と大島渚との関係では、1976年の深作欣二監督作品『仁義の墓場くちなしの花』では、やくぎにシンパシーを感じていた大島渚が警察の取締本部長役で出演しています。話を戻すと、会社側は監督は山下耕作だと強く主張し、笠原氏は反発したが受け入れられることはなく、出来上がった作品を見て決して満足していなかったというのが真実のようです。「（山下耕作の）あの美意識では、現実の特攻隊員は描けない」という言葉は、「”虚”に愛着しておのれを見失わない生き方」の山下耕作監督を否定する見解でもあります。数年後、テレビドラマ制作の打合せの席で二人は顔を合わせますが、「どうしておれのホンを書かないんだ、汚いやつだ、お前は！」とすごむ山下監督に対して笠原氏は「だれにもぶつけることが出来ない腹立たしさを抱えたまま黙ってわかれた」と記します。

山下耕作監督は、1997年まで監督活動を続け68歳で1998年に亡くられました。また、笠原和夫氏は1994年まで執筆活動を続けられ114本の作品を遺し2002年に75歳で亡くられました。